

## 高校・一般の部 最優秀賞

小山 時夫

過日テレビで日露友好行事、シベリア鉄道の旅が放映されました。日本人の旅人が、美しい風景や美味しそうな料理の前で自撮りのカメラに収まる姿を見て、私は違和感を覚えました。それは、この鉄道が戦後シベリアに抑留された日本人の血と汗と涙の助力があって出来たもの知っているのか、という思いからでした。

昭和二十年八月十五日終戦と同時に、ソ連軍（現ロシア）が旧満州（現中国東北部）に侵攻、武装放棄した日本兵を捕虜として連行、抑留、四年間に渡り強制労働させた一環で出来た鉄道であることを知っているのか、ということです。

私の兄（故人）は、その抑留者の一人でした。連行される時は、「帰国させる為ナホトカ港に行く」と列車に乗せられたそうですが、着いた場所はシベリア山中の収容所。そこでの主な仕事は鉄道に使用する枕木の伐採、激戦地でなかった満州が一日にして地獄になったのです。

食事は黒パン一個、朝晩の二回のみ、労役のノルマは厳しく栄養失調で結核になる人、冬は気温マイナス四十度で「おやすみ」と言って寝た隣りの戦友が、翌朝には冷たくなっていた。また腰まで雪に浸かる中での伐採、倒れてくる大木の下敷きになり命を落とした等々、その遺体を埋葬するにも凍土が固く穴が掘れず大変で、翌日には狼に墓が荒らされていた事もあったと言います。

この頃は「食べる」「寝る」「生き残る」の三つ以外は考えられなかったとのことでした。

このように兄の兵役は軍隊一年、抑留生活四年の変則なものでしたが、幸い生きて帰国することが出来ましたが、体力が回復するまでの一年は寝たきりの暮らしでした。

シベリアに抑留された人は兵隊ばかりでなく、女・子供的一般人を含め、約六十万人、そのうちの四割、二十四万人の人々が犠牲になったと言われています。

戦後七十五年経った今でもこの人々の遺骨收拾もままならないのが現実です。

戦争はこの様に非戦闘員である弱い人ほど苦しみを受けるものです。この様な戦争を二度と繰り返さないよう、後世に伝えていきたいです。